

# 馬券のヒント!

HINTS ON PICKING WINNERS



ガラスの競馬場 治郎丸敬之

2005年5回6日

京都

11レース

第22回 (G1)

マイルチャンピオンS

11月20日

1010010079573

3800001191837

D5C7 20276552

WINS広島

WIN

単

勝

WIN

デュランダル

★30000円

合計★3000枚★30000円

できればこの馬券だけは  
公開したくなかった、  
というのが本音である。

デュランダルを買うかどうかは、本当にギリギリまで迷った。なぜ迷ったかというと、デュランダルには前走からの反動があるのではと危惧していたからだ。デュランダルは歴史に残る屈指のマイラーであることは承知しつつも、今回のレースに限っては末脚が不発に終わることがあるのではないかと、週の初めから、心のどこかで気に掛かっていた。

デュランダルが2着したスプリンターズS2005の観戦記で、私は以下のように書いている。

「デュランダルは32秒7という鬼脚を使ったが、昨年同様に届かず2着。今年は勝った馬が強すぎた。それにしても、コンスタントに追い込んでくる柔軟な末脚にはいつも驚かされる。持病の裂蹄を克服して、なんと10ヶ月ぶりのレースだけに価値は高い。まさに歴史に残る末脚を持った馬である。ただ、次のマイルCSに出走してくれば人気になるだろうが、反動が心配である。今回のレースで7kg体重を減らしていたことや、32秒台というサラブレッドとして限界の脚を使ったことによる反動が出てしまうのではないか。」

私が気に掛かっていたのは、デュランダルが10ヶ月の休み明けにもかかわらず、32秒台という強烈な末脚を使ったことによる反動が出ないかどうかという点である。極端な脚質（追い込み一辺倒）による取りこぼしや、不向きな展開（超スローペース）を心配したわけではない。デュランダルには後ろから行く競馬が合っていることは確かだ、たとえスローの展開になら

うとも勝つことのできる柔軟な末脚は、これまでの戦績が十分すぎるほどに証明している。そうではなく、前走で強烈な脚を使って日本馬の意地を見せたことが、今回のマイルチャンピオンシップにおいては逆にアダとなるのではないかと危惧したのである。

とはいえ、昨年のデュランダルも休み明けのスプリンターズS2着↓マイルチャンピオンシップというローテーションで優勝したではないか、という反論もあるかもしれない。昨年と同じパターンだからこそ、今年も人気になったという面もあるだろう。しかし、昨年のデュランダルと今年とで、明らかに異なる点がひとつだけある。

それは、前走のスプリンターズSで使ったラスト3ハロンの脚である。

2004年↓35秒8

2005年↓32秒7

およそ3秒もの違いがあることが分かる。もちろん、2004年はドドロの不良馬場で行われたのだから、上がりタイムも遅くて当然である。しかし、同じ2着でも全体のタイムや上がりの時計が異なれば、脚元への負担も全く異なる。特にデュランダルのような蹄に問題のあるような馬にとって、32秒台の脚を使ったことによる負担は想像以上に大きい。パンパンの高速馬場で、しかも休み明けにもかかわらず、32秒7の脚を使ってしまったことによる反動は大きいと考えるのが普通である。

それでも人気になったのは、「ツメの不安はない」「一度叩いて上積みは大きい」という陣営からのコメントや、最終追い切りで速いタイムが出たからであろう。実際に、私もこれらの材料をもって自分を納得させようとした。ただし、デュランダルが本来のデキになかったことは結果を見れば明らかである。いや、正確に述べると、結果を見れば明らかではあるが、

中間の様子や動きからは明らかではなかった。陣営にさえも分からない、目に見えない部分で、32秒台の己の末脚によってデュランダルの肉体もしくは精神が蝕まれていたのだろう。

ここまで何だかんだと理屈を並べてきたが、つまりは私が自分自身の論理を突き詰められなかったということである。思い起こしてみると、デュランダルの3連覇というイメージに引きずられ過ぎた気がする。32秒台の末脚による反動が頭のどこかに引っ掛かりながらも、同一のG1レースを3連覇するという快挙を成し遂げるとすればデュランダルしかないのではない、と一方で考えていた。この気持ちは今でも変わらない。そして、デュランダルの3連覇に便乗する形で、自分も馬券で勝とうと考えていたのである。

まさに、「勝ちたい」という自分のだらしなさが感じられる馬券である。馬券は正直だから、そのだらしなさは如実に表れるし、隠すことができない。馬券には、恐ろしいほど人物が出る。個性・生き方・競馬に対する姿勢など、その人の全てが凝縮されて馬券に表れてしまう。「勝つことがすべて」ではない。勝ち負けはあとから付いてくるものであって、勝ち負けにこだわって縮こまっていけない。こだわるべきなのは、自分にしか買えない馬券を買うことなのである。

私の尊敬する基打ちの藤沢秀行氏はこう言う。

「碁は無限なり、個を立てよ」

私流に解釈すると、こうなる。

「競馬は無限なり、個を立てよ」

この本の1ページ1ページに、物語があります。

たとえば、この本の41ページを開いてみてください。「屈腱炎の馬は続けて走らない」というヒントがあります。これは私がまだ若かりし頃、ナリタブライアンよりも強いと思い込んでいたナムラコクオーが、屈腱炎明けのNHK杯を圧勝して臨んだダービーで凡走してしまっただけという、私にとって大変悲しい結末から気付いたヒントです。それ以降、屈腱炎を患った馬を見る度にナムラコクオーを思い出し、激走した後の反動を知りつつも、つい応援してしまいたくなくなったりします。

「斤量の考え方」というヒントは、ディープリンパクトが凱旋門賞に挑戦するにあたって、どれだけ不利な条件を克服しなければならぬかを示したものでした。できることならば、このようなヒントは書きたくなかったですし、ディープリンパクトにはあらゆる悪条件を克服して勝って欲しかったというのが本音です。ちなみに、「斤量が馬体重の12%を超えるとこたえる」というヒントは、故野平祐二調教師から授かった教えになります。この本に書いてあるヒントは、先人方の知恵の結晶でもあるのです。

どのページを開いても、あのサラブレッドのあのレース、そして競馬に費やした私の青春時代が鮮やかに思い出されます。たくさん時間を費やして、たくさんの人々にも心配をかけてきましたが、それでもここに100のヒントが残りました。そういった意味でも、これらのヒントは私の力だけで生み出してきたものでは決してありません。私と共に歩んでくれた家族、競馬仲間、そして愛すべきサラブレッドたちに感謝します。

「馬券のヒント」を書くにあたって、二つだけ気をつけた点があります。ひとつは、普遍的

なことを書くということです。たとえば、「中山の1200mは外枠有利」とか、「エンドスリープ産駒はダートの短距離で狙え」とか、そういう断片的なことにはなるべく書いていません。もちろん断片も大切なのですが、こと「馬券のヒント」に関しては、考えていただく行きを深めるために敢えて避けました。

もうひとつは、あまりに具体的に詳細に書きすぎないということです。競馬についてもっと真剣に考えていただくために、あえて行間を持たせています。あくまでもヒントですので、書いてあることをそのまま受け止めるのではなく、さらにその後ろにある大きな意味を読み取ってみてください。「なるほど、そうだったのか!」と発見したり、「そうそう」と確認したり、「こりゃ違うんじゃないか?」と疑問に思ったりすることもあるかもしれませんが。そうして、ご自身の発想・気づきを深めるきっかけやヒントになれば幸いです。

ヒントとヒントの間にはさんであるコラムも、馬券のヒントになりそうなものばかりを集めてみました。昔に書かれたものを、なるべくそのまま使わせてもらっていますので、その時代における競馬に賭ける私の熱い想いがヒシヒシと伝わってくるはずですよ。

最後に、「馬券のヒント」は読むだけの本ではなく、使う本です。頭で理解する本ではなく、身体で感じる本です。私が数々の実践で手に入ってきたヒントを、あなたも実際に体感してみてください。そのためには、机の上に置いておくのではなく、通勤通学の途中で繰り返し読んでみてください。トイレに置いていただいても構いません(笑)。競馬場に持って行って、実戦で試してみてください。使い込まれたジーンズのようになれば、それはあなたにとっても、私にとっても、そしてこの本にとっても勲章になることでしょう。

## スローペースは内枠が圧倒的に有利。

スローペースでは、馬群が固まり、団子状態になる。団子状態の外側と内側を回るのは、走る距離にかなりの差が生じる。外枠を引いた馬は、終始外々を回され、かなりの距離ロスをしてしまう。スローペースが想定されるレースでは、団子状態の内々の経済コースをロスなく回ることのできる、内枠の馬を狙ってみるのが面白い。

コーナーの数と内枠の関係

## コーナーの数が多くなればなるほど、内枠が有利になる。

コーナーで外を回れば回るほど、内からの圧力で馬はスタミナを消耗し、距離損も計り知れない。そのコーナーの数が多いコースであるほど、インコースを進むことのできる内枠の馬が有利になるのは当然。コーナーが2つよりも3つ、3つよりも4つのコースの方が、内枠の馬にとって有利になる。そして、小回りの競馬場においては、なおさらその傾向は強まる。

## 「上がり不問」のレースでは、逃げ先行馬を狙え。

コース形態や馬場状態の影響で、全体の時計に比べて、上がり3ハロンの時計が異常に掛かるレースを、「上がり不問」のレースという。このようなレースでは、逃げ・先行馬だけではなく、差し・追い込み馬もバテているので、前が止まらないのではなく、後ろも止まってしまっている展開になる。最後の直線で順位の入替わりが少なく、行った行ったの展開になりやすい「上がり不問」のレースでは、前を進み、そのまま雪崩れ込める、逃げ・先行馬を狙え。

スローペースの内枠

3

「上がり不問」のレース

5

## あちらこちらから、「ハイペース必至」という声が聞こえてきたらスローペース。その逆も、また然り。

誰もが「ハイペース必至」と予測するレースは、ほとんどの騎手もそのように意識する。大半の騎手がハイペースに巻き込まれることを嫌い、手綱を抑えて馬をゆっくりと走らせた結果、レースは思いもよらぬスローペースとなる。逃げ馬がおらず、「スローペース必至」とされた時もまた同じ。大半の騎手がスローペースに乗じるために、無理をしてでも好位置を確保しようとした結果、レースは思いもよらぬハイペースとなる。



# 馬券のヒント

HINTS ON PICKING WINNERS

## 「内枠有利」は、コーナーを回る競走の原理原則。どこに行っても、この原理原則は永久不変である。

外を回れば、距離ロスがあり、さらに遠心力によって馬に負荷が掛かる。無理をせずに経済コースが通られる内枠が圧倒的に有利なことは、コーナーを回る競走の原理原則である。東京競馬場だろうが、シャンティン競馬場だろうが、浦和競馬場だろうが、たとえ子供の運動会だろうが、この原理原則は変わらない。

展開の最も簡単な読み方

1

コーナーを回る競走の原理原則

2